

『神の国、神の支配』

神学の教養

長澤牧人 | 熊本聖書教会

2022/3/24 祈禱会テキスト

福音は2種類あります。1つはイエスさまが伝えた福音です。もう1つはイエスさまについての福音です。2つは福音は密接につながっていますが、それぞれの特徴があります。

イエスさまが宣べ伝えた福音は「神の国の福音」です。

ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。
(マルコによる福音書1章14節-15節 新共同訳)

神の国、つまり神の支配が近づいたと。では神の支配はいつ実現するのか？

イエスさまの答えはこうです。

ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』、『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」(ルカによる福音書17章20節-21節)。

すでに神の支配は地上にやって来ましたが、完全に実現するのは将来です。

「それらの日には、このような苦難の後、／太陽は暗くなり、／月は光を放たず、星は空から落ち、／天体は揺り動かされる。そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見ると、そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める(マルコによる福音書13章)」

神の支配の実現は人間の努力によりません。神の主権によって、神によってのみ実現します。

人間ができることは何もありません。

キリスト者は神の支配にふさわしい生き方を教会で続け、神の支配が到来するのを待つだけです。神の国は神が王である国であり、地上の国民国家の支配とは関係がないからです。

イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでの実を結ばせるのであり、まず莖、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる(マルコによる福音書4章26節-27節)」。

イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない（ヨハネによる福音書18章36節）」。

これが初代教会の信仰でした。教会は少なくとも12世紀まで、政治改革や社会改革に無関心でした。教会が待ち望む神の支配は「この世に属していない」からです。この世で暮らす間は、模範的国民として暮らすのみです。

すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい（ローマの信徒への手紙13章7節）。

初代教会に倣うキリスト者は神にのみ期待し、世俗の政治には期待しません。

ローマ帝国であれ、民主主義であれ、自由主義であれ、社会主義であれ、SDGsであれ、ジェンダー平等であれ、人為的努力が神の支配を実現することはないと知っているからです。どんな社会体制であっても、どんな政治状況であっても、キリスト者は信仰を保ち、祈り、感謝して平安の内に生きるのです。

そこで、まず第一に勧めます。願いと祈りと執り成しと感謝とをすべての人々のためにささげなさい。王たちやすべての高官のためにもささげなさい。わたしたちが常に信心と品位を保ち、平穩で落ち着いた生活を送るためです。これは、わたしたちの救い主である神の御前に良いことであり、喜ばれることです（テモテへの手紙—2章1節—2節）。

ところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませぬ。神は、彼らのために都を準備されていたからです（ヘブライ人への手紙11章16節）。

神の主権、神の意志と力だけが神の国を実現します。

これがペンテコステ運動が奉じる再臨信仰の政治的意味です。

ところが神の支配ではなく、国家の人為的支配で平和と自由を実現しようとする野望は後を絶ちません。人の力で平和と自由を実現する試みはしばしば最悪の結果を生みます。理由は、人為的支配で平和と自由を実現しようとする試みは力のある大国が目指す野望であり、力による実現は常に不正義を伴うからです。

《以下、筆者の視点と見解》

1991年以前の世界は二極構造でした。西側の盟主アメリカと東側の盟主ソ連が力の均衡によって国際秩序を保っていました。ところがソ連崩壊に伴ってアメリカ一極構造になりました。アメリカ一強の国際社会です。

アメリカ上層部は新しい国際秩序を実現できるチャンスと見ました。アメリカに対抗できる勢力がいなくなったからです。アメリカは満を持して世界改革に乗り出しました。目標は3つです。第一に自由民主主義を世界中に広めること。第二に、すべての国を自由主義経済に組み込むこと。第三に、すべての国を世界通貨基金や世界貿易機関や北大西洋条約機構などの国際機関に

組み込むことです。

アメリカ政府は民主主義と自由主義経済と自分が創設した国際機関に絶対の自信を持っていました。3つの信仰が前提にありました。①民主主義国家になれば人権が守られる。②民主主義国家同士は戦争しない。③だから世界中がアメリカのような民主主義国家になれば世界平和が実現する。

まずクリントン政権が北大西洋条約機構の東方拡大を進めました。ブッシュ政権がアフガニスタンとイラクに軍事侵攻して民主主義を輸出しようとした。オバマ政権がリビアとシリアの独裁政権を軍事攻撃によって倒そうとしました。

アメリカの世界改革の野望は止まりません。1999年、ポーランド、ハンガリー、チェコを北大西洋条約機構に加盟させました。続いて2004年4月2日、中東欧の7ヶ国、ルーマニア、ブルガリア、スロバキア、スロベニア、エストニア、ラトビア、リトアニアが北大西洋条約機構へ加盟しました。2008年4月3日には北大西洋条約機構サミットでアメリカはドイツの反対を押し切り、「将来はグルジアとウクライナを加盟させる」と宣言しました。2014年2月22日にアメリカはクーデターを支援し、ウクライナの親露派大統領を国外に追放しました。

ロシアに直接国境を接するウクライナにまでアメリカの手が伸びた時、強い危機感を覚えたロシアは2014年2月27日にウクライナの一部でありロシア系住民が多いクリミアに侵攻しました。2008年に「グルジアを北大西洋条約機構させる」と NATO が宣言した同じ年にグルジアに侵攻したように。

2021年にウクライナ大統領ゼレンスキー氏が北大西洋条約機構と EU 加盟に向けて動きつつ、10月には東部の親口派勢力への攻撃にドローンを使用しました。12月、怒ったロシアは、米国と北大西洋条約機構に NATO 不拡大の確約などを求めましたが、アメリカのバイデン政権は拒否しました。1962年にソ連がアメリカの裏庭であるキューバに核ミサイル基地を建設していることが発覚した時、アメリカは核攻撃による反撃を真剣に検討しました。ウクライナが北大西洋条約機構に加盟するということは、ロシアの視点からすれば、「逆キューバ危機」が起こりえるということです。そして歴史は動きました。2022年2月、ロシアはウクライナに軍事侵攻しました。アメリカとヨーロッパ諸国は自分たちの血は流さず、武器だけウクライナに与えています。「ウクライナ人よ、諦めるな。戦え！」と。

アメリカの世界改革はすべて失敗しました。2021年のアフガニスタンのタリバン復権は典型です。アメリカの「善意」によって、アフガニスタンもイラクもリビアもシリアもウクライナも多くの血を流し、多くの命を失いました。民主主義も自由主義経済も国際機関も悪い制度ではありません。でも人為的支配で自由と平和を実現しようとすると、無秩序と流血に終わってしまいます。ソ連のスターリン政権も、毛沢東の文化大革命も、カンボジアのポルポト政権も、地上の理想郷建設を目指して、何百万人もの命を奪いました。人の罪は「大義」において最も大きく現れます。

ウクライナ紛争で心が騒ぐときにこそ、イエス・キリストが宣べ伝えた福音に戻りたいと思います。神の国の福音です。神の主権と力だけが、真の平和と自由を実現します。「人の国」の力はどんなに善意であっても、狙いと反対の結果を生んでしまいます。キリストの再臨を待つとは、「神の政治」に対する信仰、そして神の国を実現できるお方に対する信仰を持ち続けるということです。主の祈りを唱える時、神の国の福音を心に刻みましょう。

「御国を来たらせたまえ。御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」